

文禄の役の狭間で

清正をめぐる数奇な人々

新井 宏

加藤清正。熊本では今でもセイシヨウコウ(清正公)と崇められ庶民信仰の対象ですらある。

もともと熊本は寛永九年(一六三二)に加藤家二代目の忠広が家光により改易されて以来、細川家が治めていたところ、それなのに未だ人気は加藤清正にある。代々の細川家がよほど寛容だったのかも知れないが、単なる虎退治の武将にしては出来すぎた話である。

加藤清正。永禄五年(一五六二)に今の名古屋市中村区に生まれた。幼名を虎之助といい、母が秀吉の生母の叔母にあたることから、秀吉子飼いの武将となり、賤ヶ岳の合戦等で多くの戦功たて、天正十六年(一五八八)には早くも肥後の領主佐々成政改易に際して肥後を小西行長とともに分与され二十五万石の熊本城主となっている。

さらに慶長五年(一六〇〇)には関が原の戦いで家康につき、小西行長の旧領等合わせて、五十四万石の大名

となり、慶長十六年(一六一一)五十歳で没している。

とにかく有名人であるからこのような紹介は不要だったかもしれない。賤ヶ岳の合戦、虎退治、蔚山籠城、伏見地震、家康と秀頼の二条城会見、名古屋城の清正石等々のエピソードは、年配者なら誰でも知っている話である。

ところで加藤清正がどの程度の有名人なのかちよつと証明して見よう。

戦前の尋常小学校では、誰もが同じテキストで修身と唱歌を習っていた。修身には各学年ほぼ二十七課ずつあり、例えば五年生用では忠義、公益、儉約、孝行、勇氣、忍耐、度量、博愛、徳行などのキーワードで、その実例として内外の有名人の逸話を載せるのがひとつのパター

ンであった。また小学唱歌もほぼ二十七曲ずつあり、「白地に赤く」は一年生の初めに、「春がきた」は三年生の初めに教わるようになっていた。かくして六年間で全国民が、約百五十課の修身と約百五十曲の唱歌を習うわけであるが、その中で修身にも唱歌にも登場する人物が四人だけいる。

もちろんそのトップは二宮金次郎である。ともに二年生で習う。これはまったく別格である。次が三年生唱歌の「豊臣秀吉」で、修身では五年生の「謝恩」の課に出てくる。そして三番目が五年生唱歌の「加藤清正」であり、修身では五年生の「信義」と「誠実」のふたつの課に出てくる。後は五年生唱歌の「水師營」に出てくる乃木希典で、修身では六年生の「清廉」に登場している。だから加藤清正は問題なく日本を代表する「誠実で信義あつい」有名人なのである。こんなことで証明になったであろうか。

このように、日本では非常に人気の高い豊臣秀吉や加藤清正であるが、もちろん韓国では正反対に悪や鬼の代名詞である。無理も無い。秀吉は文祿慶長の役（壬辰倭乱丁酉再乱）を起した張本人であり、また加藤清正は小西行長とともにその戦役を通じて、自らも最大の死傷者を出しながら最初から最後まで戦った猛将である。しかも和陸志向の強かった小西行長とは異なり、常に主戦派

であり続けたのが清正であり、それだけ恨まれる立場にもあった。だから韓国ではかつて「キヨマサオンダ（清正がくるぞ）」と言えばむずかる子供を黙らせる効果があったという。

なにしろ文祿・慶長の役では加藤清正はまさに主戦投手の位置にあっただけに、清正の周辺には日韓の歴史の狭間にその名を伝える数奇な人物も少なくない。その代表的な例が、沙也可であり、毛谷村六助であり、余大男である。

沙也可（金忠善）

かつて司馬遼太郎が「街道をゆく・韓のくに紀行」の中で紹介して以来、日本にも良く知られるようになったのが、いわゆる降倭領将「沙也可」である。降倭領将というのはもちろん韓国側の用語で、降伏して朝鮮側に付いたわけではないので、最近では帰化倭将ともいっている。その存在は朝鮮側の資料に幾つか記録されており、『慕

夏堂文集』では「加藤清正軍の右先鋒として三〇〇〇人の兵を率いて十三日、釜山に上陸、直ちに略奪を禁じる軍令を下し、二十日、反旗をひるがえして朝鮮軍に投降した」と伝えている。

また正史『李朝実録』等の記録では、沙也可は鉄砲の技術に優れたため、李朝に厚遇され金海金氏の姓を賜り金忠善と名乗り、三〇歳の時、晋州牧使の娘を娶り、後

の清朝の朝鮮侵攻の時(丁卯胡乱、丙子胡乱)にも活躍し「三乱の功臣」と称えられ正憲大夫(正二品上)という高級官職にまでのぼったとある。一六四三年七二歳で死没。望郷の七言絶句を残しているというので、教養人であったのかも知れない。釜山に上陸した時は弱冠二十歳であった。

しかし日本側にはそれに相当する記録がない。沙也可が鉄砲に優れ、しかも沙也可の音が鉄砲傭兵集団の雑質衆に通ずるので、これを雑質とする説が有力であるが、その他にもさまざまな説がある。

まずは沙也可は沙エ門の写し間違いとする司馬遼太郎説、加藤清正の配下の岡本越後守あるいは阿蘇宮越後守説、小西行長の鉄砲隊の沙姓説などであるが、いずれにせよ加藤清正配下であった可能性が高い。特に越後守説は「宇都宮高麗帰陣物語」や『朝鮮記』に加藤清正の家臣であった越後守が蔚山城攻防戦で朝鮮側の講和の使として現れたと記録されていて、彼が沙也可と同一人物であったことを思わせるが、加藤家中には身分ある武将が逃亡あるいは投降したとする記録はまったくない。

韓国側の伝える沙也可像は「儒教の文化に憧れ、その文化の行き届く国に兵を向けて侵す義は何もない」として朝鮮に投降したとあるが、実情は雑質衆のような傭兵集団であり、既に銀や銅の貿易を通じて国際化していた

日韓関係にあつて、どちらに付くかは打算の問題だったのではなからうか。第一、儒教が日本に広まるのは文禄慶長の役のあとなのだから。しかし日本の高校教科書にも、記録によるとしながら「朝鮮の礼・義と中華文物のさかんな様子を慕い、その配下を引き連れて朝鮮側に投降した」とある。歴史教科書歪曲問題の影響であろうが、ここまで配慮することもあるまい。

もつとも歴史的に見ると、沙也可は日本から抹殺されて続けて来た。徳富蘇峰や内藤湖南らの歴史学者はこぞつて『泰夏堂文集』を偽書と断じていた。ただその中にあつて、朝鮮総督府の朝鮮史編修官であつた中村榮孝が『李朝実録』にも同じ内容があるのを見つけ、友鹿洞を訪れ、金忠善の直筆の婚書(納采)を発見して、その実在を報告していた。当時としては極めて勇氣ある行為であつた。なんとなく司馬遼太郎が発掘したように思つていた「沙也可」の歴史にも、このような前史があつたのである。

沙也可は義兵将として有名な郭再祐とともに第一次晋州城戦で日本側を敗退させている。この時の手柄で宣祖から金海金氏の姓を下賜され両班に取り立てられている。またおそらくその時の縁で晋州牧使張氏の娘を娶つたのであろう。牧使は当時の地方長官であるから、かなりの名家から妻を迎えたことになる。このことは沙也可がかなりの教養人であつた可能性を示唆しているように思

え、望郷の七言絶句を残したのも、まんざら作り事とも思えない。

沙也可は一六一四年、大邸の南にある友鹿洞に住み着いた。いまも友鹿洞には沙也可の十四代目の子孫が住んでいて、家訓十条が伝えられている。

その中には、① 栄達を求めぬなかれ、② 努めて耕し努めて学べ、③ 富貴を願わず、④ 清を尚び儉を尚べ、⑤ 家においては親に孝、⑥ 外に出ては君に忠、⑦ 酒色に溺れるなかれ、⑧ 賭博はするなかれ、などであり、日本的な面が多く伺える。

韓国は面白い国で、各家庭に必ず族譜という系図がある。それによれば沙也可すなわち金忠善を祖先とする金氏一族は、賜姓金海金氏として分類されていて、全国に二千六百五十世帯、約八千人いることが判っている。

子孫の宗家の住む友鹿洞には、いま鹿洞書院という沙也可(金忠善)を祭った書院がある。普通の学問のための書院ではなく、一七八九年にこの地方の儒学者たちが金忠善を顕彰するために建てたものである。大邸市の南二十キロにある小さな村であるが、最近では日本からの観光客も増えているようで、ボランティアの日本語案内人もいる。ちよつと質問したりすると十四代の子孫という金泰烈氏が出て来て相手をしてくれる。そこには八角銃身の火縄銃が展示してあったが、道路工事中に発見されたものとかで、日本でも珍しいものだ。

沙也可が加藤清正の家臣であったか否かは別としても、ちよつど沙也可が朝鮮側につくころ、加藤清正不在の肥後国では梅北一揆が起きていた。島津家の家臣梅北国兼が肥前名護屋城に向かう途中、反乱を起しそれに農民が加わり、佐敷城を手にするほどの勢いがあったが、秀吉によって鎮圧されている。沙也可との関連はもちろん判らないが、清正が肥後を治めるようになってから、まだ四年目のことであった。

毛谷村六助(木田孫兵衛)

いま日本で毛谷村六助を知る人は歌舞伎通ぐらいである。しかし韓国では誰でも知ってる人物である。それは論介が第二次晋州城戦で城が陥落後の酒宴で、彼を抱かかえたまま南江に身を投じ殉節したからである。

朱論介。韓国で一番有名な女性の名前を挙げてもらうと必ず最初に出てくるのが論介であり、二番目が儒学者栗谷李珥の母で、女流漢詩人であった申師壬堂である。いわば論介は韓国人にとってジャンヌダルクにも比すべき救国の念に燃えた愛国の烈女なのである。

その論介はかつて妓生と見られていたことがあった。当初の記録に官妓とあったのでそうならしい。しかし、なにしろ超有名人であった。大勢の歴史学者たちも参加して、文献や口伝説話の調査が行われた結果、いま

では両班階級の出身で、第二次晋州城戦で籠城側の副将格で慶尚右兵使に上っていた義兵將崔慶会の妻であったというのが有力である。国民的な愛国の烈女が妓生では格好の付かない思いをしていた多くの韓国人もこれではとっとしたに違いない。

一五九三年六月十九日にはじまり、二十九日に終わった第二次晋州城戦は立てこもった軍兵と民衆六万人が悉く殺されるという悲惨なものであった。

その前年の四月に釜山に上陸して以来、時を置かず首都漢陽を陥落させ平壤を占拠した日本軍も、年が明けると明の本格的な参戦もあり、海戦では李舜臣に痛めつけられ補給が閉ざされ、動きがとれなくなっていた。碧蹄館では戦闘的には明軍に圧勝したものの、もはや漢城を維持する力はなかった。

講和の機運が高まっていた。日本と明は朝鮮の頭越しに現地での交渉をまとめる。そして漢城の日本軍は四月になると明軍の了解のもとで残りの食料を携え無事に釜山近くまで撤退する。明から見れば兵力の損耗なく、日本軍を漢城から駆逐したことで、明の安泰は確保したことになる。日本は戦闘に勝って戦争に負けた。

そして五月十五日には明の使節が名護屋に到着し、秀吉と会話し本格的な講和交渉が始まる。この時示した秀

吉の要求は、当時の戦況から見れば現実ばなれしたもので、ゼロ回答が不可避であった。それを避けるためには、既成事実をつくること何よりも重要であった。せめて慶尚道だけでも実効支配をして、戦果としなければ豊臣政権の存続さえ危うくなる。

そこで出された方針は、慶尚道の各地に日本式の城を築き、支配の実態を整えることと、晋州城を抜いて全羅道を支配化に置くことであった。特に、第一次晋州戦で日本側が敗退したことを秀吉が激怒しており、晋州城攻撃問題はすでに戦略的な次元を越えてしまっていた。

日本側は第二次晋州城攻撃に総力を注ぐ。これには、やっとの想いで南下撤退してきたばかりの小西行長、加藤清正、黒田長政ら五万五千名も主力として加わり、補給軍を合わせると十二万の大軍となった。明や朝鮮側から見ればまさに背信行為とさえ映ったであろう。

一方の守る側の態勢は複雑であった。講和によって日本を追い払うことに期待かける明軍は、城を明け渡した方が得策であると傍観して動こうとしなかった。在地の義兵たちも、戦術論をめぐって意見が対立し、第一次戦で活躍した紅衣將軍の郭再祐も城に入るのを拒否する。また当の晋州城主ともいべき牧使の徐禮元は大軍におのきの、城内にとどまるのさえやっとの状態であった。

その中で、推されて指揮とることになったのが義兵司令官ともいべき倡義使の金千鎰と慶尚右兵使に上って

いた義兵将の崔慶会である。いずれも全羅道の出身であった。このことが示しているように、第二次戦の主力は前回と異なり地元勢よりは、むしろ全羅道の兵士たちであった。晋州城が落ちればもはや全羅道は守れないという危機感のためでもあったろうがやはり異常であった。それでも、第一次戦の倍、すなわち七千名程度の兵士を確保することに成功する。そこまでは良かった。

しかし異様だったのは、非戦闘員が次から次へと五万人余も城に逃げ込んできたことである。そもそも朝鮮半島の城は逃げ込むためのものであるから当然とも言えるが、やはり第一次戦で日本側を撃退した経験が大きく影響した。これが悲劇を大きくしてしまった。

戦闘の経過は凄惨であった。秀吉の命は「最前せめそこない候城にて候條、一人も不洩やうに悉可討果事」とあった。この時秀吉は一般民衆が多数逃げ込んでくることなど想像もしていなかったにちがいない。しかし命令は忠実に守られる。

六月十九日に始まった包囲戦は、連日激しい攻防が続き、双方に多くの犠牲がでるが、結局は六月二十九日の城壁の崩壊が城の運命を決める。加藤清正配下の森本儀夫と黒田長政配下の後藤基次が先陣を争って城内に入る。最後まで残って戦った金千鎰や崔慶会らは南江を臨む蘆石楼で宴を催し南江に投身して果てる。城内では、人はもとより、牛、馬、鶏、犬に至るまで悉く殺され、南

江に投じた者等を合わせると死者は六万余人にのぼったという。

そして月があけ、七月七日の七夕の夜、晋州城の蘆石楼で戦勝祝賀会が開かれた。この時の主役はなんとと言っても加藤清正であった。さほど広くもない蘆石楼に配下の武将たちを引き連れ宴をはった。この時二十歳の論介は、官妓のように装い、夫・崔慶会の果てた南江上の蘆石楼に待る。期するものがあつた。

論介が崔慶会の妻(妾)となつたのは十七歳の時であった。きっかけは母子家庭となつた六歳の論介が、叔父によって博打の借金のかたに売り飛ばされたのを、長水県監であつた崔慶会が裁判で助けたことであつたらしい。行く場所のない母子は、その後官婢のような形で崔慶会に仕える。そして病弱であつた崔慶会の夫人に請われて十七歳で側室になるが、その時に論介は身分を妓籍に落としていた。官吏は良家の娘を妾にすることが出来なかつたからだという。だから論介は官妓として伝えられていたが、本来は両班出身だという訳である。

論介にとって崔慶会は夫であり父であつた。自分も夫のように蘆石楼から投身して果てる。それが彼女の選択であつた。せめて夫の仇討ちのために有力な武將を道すれにして。

しかし言葉の通じない中で、有力な武將を探し、南江

の岩上に誘い出すのは容易ではなかった。宴盛んな蘆石楼から見下ろせる大きな岩端に、艶かしく装い、微笑んで立って誘うのが作戦であった。

これに気づいたのが毛谷村六助であった。酔った足取りで大きく張り出した岩の上に降り立つと、論介が手招きしている。南江に三日月が映えていた。そして花びらが散った。

その岩をいまは義岩という。論介の号にちなむという。

死んだ毛谷村六助は本名木田孫兵衛という加藤清正の参謀長格の武将で、日本側の記録では兀良哈で戦死したとなつている。また六助の出生地の豊前英彦山の麓に残る『六助略縁起』によれば、戦後凱旋して余命を日本で過ごしたこともある。したがって論介が道連れにした相手は毛谷村六助ではない可能性もある。事実、論介が初めて記録に登場するのは乱後三十年近くたつて柳夢寅が書いた『於于野談』の中であるが、そこにはただ倭将とだけある。一七七九年の丁茶山の書いた『晋州義妓祠記』も同様である。また晋州近隣に残る民謡でも「倭将キヨマサ（清正）の身を抱き」とあつて異なつている。だから国立晋州博物館の編纂した『壬辰倭乱』の中には毛谷村六助の名はない。

日本で毛谷村六助が一般に知られるようになったのは、おそらく歌舞伎「彦山権現誓助太刀」が初演された一七

六六年以降のことであろう。気は優しく力持ち、立川文庫の豪傑のひとりとしても登場する。そんなことから、論介の相手の武将として仮託されたのではなからうか。ちよつと詮索しすぎかもしれないが。

余大男（高麗日遙上人）

第二次晋州城戦で城が陥落した直後、各将配下の兵が近隣の村々を略奪して廻っていた。その頃すでに日本側は食料も軍資金も自ら稼ぎ出さなければならぬ状況まで追い詰められていた。国許では労働力が極度に不足していた。

第二次晋州城戦では結局「牛、馬、鶏、犬に至るまで」悉く殺すことになってしまったが、本音では捕虜を必要としていた。国許の労働力不足を補うばかりでなく、捕虜を次々とポルトガルに売り払いヨーロッパの奴隷市場に送りだしていた。

晋州城の西方三十キロにある河東郡の良甫面に加藤清正配下の軍勢が入つたのは月のあけた七月初旬のことであつた。

晋州城のある慶南地方では小さな山並みを縫うかのようにならぬ、三百メートル位の中の細長い平野が曲がりくねって広がっている。「山の向こうは山」の日本とは異なり、山を越えるとまた里がある。

ちよつと晋州から良甫への道のりもそんな山間を縫つ

て半日あまりの行程であるが、さすがに良甫まで行くと標高も上がり、そこを越えようと今度は蟾津江までなだらかに下りになる。

その奥まった良甫面にある双溪洞の普賢堂で当時わずか数え十三歳の余大男は捕らわれる。いつものように日課の勉強中のことであった。

ただちに普州城まで連れ去られた余大男の見たものは、何であつたらうか。そしてそこには加藤清正との運命の出会いが待っていた。

論介が殉節して果てる七夕の直前のことであつた。加藤清正は捕虜の中に漢字を書ける子供がいるとの報告を受ける。当時の武將は貿易商の小西行長も行政能力にも腕をふるう加藤清正も文字を書けなかつたという。それだけに文字に対する憧憬もあつて、清正は余大男をつれてくるように命令する。

幼い時から父より文字を学んでいた余大男は研ぎ澄まされた刃の前でも恐れることなく、「独上寒山石径斜、白雲生處有人家」と書いて読上げた。これは唐末の詩人杜牧の「山行詩」の一部をもじつたものであつた。

普通なら千字文から初め、小学を習っている年頃なのに、四書を終えて、もう詩文学の段階まで進んでいたらしい。これに感心した清正は、余大男を日本に連れ帰り僧侶にすることにした。

加藤清正はよく知られているように熱心な法華経信者

で、旗印を南妙法蓮華経としていたほどである。九州各地に妙法蓮華経の文字を入れた五ヶ寺を建立している。彼は余大男を日本に送り、身延山第二十一世日蓮宗中興の祖と敬われている寂照院日乾上人に託し、京都本国寺学道に学ばせた。

学業成つた余大男は加藤清正の城下、熊本の本妙寺に入り日遥と名のる。そして清正が亡くなつた翌年の慶長十七年(一六一二)には本妙寺三世の法灯を継いでいる。外国人でありながら、二十八歳の若さで九州地方の最大の寺院を継承したところを見ると、よほど学問的あるいは人間的に優れた人物だつたと思われる。事実寛永九年(一六三三)加藤家が改易された時には、本妙寺も一大危機に直面したが、春日局を介して將軍家光に働きかけ、新領主の細川家からも保護を得ることに成功する。いまでも続く七月二十三日の大祭頓写会は清正の三周忌に際して法華経を一夜の内に書写して供養したことに始まる。

この高麗日遥上人が慶南道河東郡良甫から拉致された余大男と判つたのはつい最近のことである。四百年間に渡り寺宝として保管されていた日遥上人の遺品の中から、三通の手紙が発見されたことが発端であつた。そこには故国の父からの古びた二通の手紙とその返書の下書き一通があつた。

まず最初の手紙は一六二〇年五月七日の日付であり、余大男が捕らわれてから二十七年ぶりのことであつた。

最初に「朝鮮国河東不居」で始まり「汝在癸巳年七月、双溪洞普賢庵被捕虜」後、未知汝之生死」と続くこの手紙によって、河東郡良甫の出身であることが判り、宜寧余氏の族譜によって、全てが判明する。男の子三人の中の長男で、本名を学測といった。

この間、生死さえ判らなかつた息子に手紙を書き送れる喜びの気持ちと、帰ってこれない息子に対する恨の気持ちの入り混じる手紙を読んだ余大男の気持ちはいかばかりであつたらうか。

それに対する余大男の返書草稿は六ヵ月後の日付けになつている。ある信義ある日本人を介しての秘密裏のやりとりだつた。手紙の到着後まもなく書いたものと思われる。

手紙では、主君に帰国を願ひ出たが、かえつて監視を厳しくされてしまい、年老いた父母の世話をできない悲哀を綴つたあとに、「これからは頂いた手紙を朝夕あがめて過ごしますので、お父上お母上もこの手紙を私と思つて、何時かお会いできる日まで待つていてください」と結んでいる。この時の主君は二代目加藤忠広で二十歳、幕府の監視下にあり、自主裁量できる状況ではなかつた。

そして父からの二通目の手紙は余大男の草稿からまた二年経過した一六二二年の日付になつている。その時、父は五十六、母は六十、そして余大男は四十になつてい

た。戦争が終わつて暮し向きは大分良くなつたが、いつも子供を失つたことが恨になつていて、帰れない事情を知りながら、なぜ還つてこないかと訴えている。そして息子の身を案じながら、生前に一度会えたなら永年の恨も一朝にして氷解するだろうと結んでいる。

余大男の噂が故国に伝わつたのは、父の手紙によると丁未年（一六〇七年）の通信使に随行していた河東の人が偶然余大男を見かけたからであつた。ただし通信使という名称は父親の記憶違いで、この時の使節は回答兼刷還使で、捕虜として連れ去られた朝鮮人を刷して還るのが目的で、各地で情報を収集していた。この頃、余大男は京都の本国寺にいたはずであるから、使節団との接触の機会があつたであろうが、修行中の身で帰国はかなわなかつたのであろう。

それにしてもそれから十三年も経つてから、手紙が届いたのはどうしてであろうか。あるいは丁未年は第二回目の回答兼刷還使の丁巳年（一六一七年）の間違いなのではなからうか。その頃であれば、余大男はもう本妙寺の三世として世に知られていたから、噂も伝わりやすかつたに違いない。

余大男すなわち日遙上人が心から加藤清正に恩誼を感じていたことは十分にあり得る。清正の三周忌に際して

法華経を一夜の内に書写して供養したと伝えられているが、それは日暹上人の心情の現れであったに違いない。

加藤清正にはそれだけの人間的な魅力があった。文禄の役の初期に、今の北朝鮮の会寧まで攻め上った時、朝鮮の王子二名を捕えているが、礼を尽くして処遇した。そのことは両王子の感謝状や礼曹司から秀吉宛ての手紙で知られているが、「慈悲は仏のごとく」とか「真の仁人」とあり、そこには社交辞令を越えるものがある。また行政面でも貿易等にも力を入れて名君との風評を得ているが、実態は清正の人間性による面が多かったのではなからうか。

だからであろうが、清正の死に際して多くの家臣が殉死しているが、その中に金宦という人物がいた。本名を良甫鑑と言ひ、もとは朝鮮二王子の小侍部であったが、二百石の会計職として清正に仕えていた。殉死は一種の社会的な強制であるから、金宦が殉死したからと言って清正の人間性を示すことにはならないが、少なくとも周囲が殉死して当然と見なすだけの人間関係が存在していたと言うことはできよう。あるいは清正の庇護なき後の厳しい事態を和らげる面もあったかも知れない。その結果、金宦は加藤清正の忠臣と崇められ、いまでは熊本城内の加藤神社に主神加藤清正と共に陪神として祭られている。また加藤清正の墓所・本妙寺の浄池廟には清正の墓に並んで金宦の墓がある。

ところで金宦という日本名と良甫鑑と言う朝鮮名にはとても気になることがある。日本において金宦と名乗ったのは会計職であったからというのが通説であるが、朝鮮で最も多い姓が金氏である。それに反して良氏は少ない姓である。だから本名の良甫鑑は良甫の金鑑(宦)だったのではないか。

いま私が何を考えているかももうお分かりであろう。金宦は余大男の郷里の良甫と関係があったのではないか。余大男が捕われた時に、彼を見出し清正に会わせたとはいえないか。それなら小説になりそうだ。

かくして加藤清正は朝鮮から連れて来た余大男と良甫鑑に守られると言うアイロニーの中にいる。

